



# 日本植物分類学会 ニュースレター

No. 101

May 2026

## 目次

### ○諸報告

- 会長および評議員選挙公示 . . . . . 2
- 2026 年度日本植物分類学会第 25 回大会 ( 熊本 ) の報告 . 2
- 2026 年度大会発表賞の報告 . . . . . 5
- 2026 年度大会発表賞受賞者喜びの声 . . . . . 5
- 2026 年度第 1 回評議員会抄録 . . . . . 7
- 2026 年度総会議事抄録 . . . . . 9
- 2026 年度事業計画および予算 . . . . . 10
- 2026 年に到着した交換図書一覧 . . . . . 10

### ○お知らせ

- 2026 年度日本植物分類学会野外研修会 . . . . . 11
- 日本植物分類学会 第 26 回大会 ( 茨城 ) のお知らせ . . 12
- 2026-2027 年度日本植物分類学会役員選挙被選挙人名簿 . 12

### ○寄稿

- 種数の数え方 . . . . . 15

### ○会員消息 . . . . . 16

## 会長および評議員選挙公示

選挙管理委員長 志賀 隆

2026年12月末をもって、2025-2026年度の役員が任期満了となります。これにともない、次期会長および評議員の選挙を、学会会則12条および役員等の選出についての細則に従い、下記の通り行います。

この選挙で選出される会長および評議員には、学会運営や活動の舵取りをしていただくことになります。大切な選挙ですので、学会員の権利である一票をぜひ投じて頂きますよう、会員のみなさまにお願いいたします。投票の締め切りは2026年7月10日（金）です。

なお、会則第13条3で定められているように、役員には在任期間に関する制限があります。今回の選挙では、以下の方に各役員の本選挙権がありません。投票用紙に記名されても無効になりますのでご注意ください。

評議員の本選挙権なし（五十音順）：片桐 知之、志賀 隆、副島 顕子、西田 佐知子、藤井 伸二、細矢 剛、米倉 浩司

また、今回役員等の選出についての細則の第2条にもとづき、評議員会から会長候補者として以下の3名の方が推薦されています。なお、評議員会推薦の会長候補者以外の本選挙権をもつ会員に投票されてもかまいません。

評議員会推薦の会長候補者（五十音順）：永益 英敏、西田 佐知子、藤井 伸二

### 選挙実施細目

1. 投票締切：2026年7月10日（金）（当日消印のものまで有効）
2. 投票用紙：投票には、ニュースレター本号に同封されている会長選挙投票用紙（桃色）と評議員選挙投票用紙（緑色）を使用してください。それ以外の用紙を用いた場合、無効となります。
3. 記入方法：ニュースレター本号の選挙人名簿をご覧になり、会長選挙投票用紙（桃色）に会長候補者1名を、評議員選挙投票用紙（緑色）に評議員候補者8名以内をそれぞれ記入してください。同姓あるいはよく似た名前の会員がおられます。投票に当たっては選挙人名簿を参照の上、氏名を略さずに記入してください。規定数を超過して候補者名を書かれた場合は、その票自体が無効となります。また、会員以外の候補者名を書かれた場合は、会員以外の部分のみが無効となります。
4. 投票用紙の郵送：記入後、投票用紙を二つに折り、同封の返送用封筒に入れて郵送してください。封筒には、ご自分の住所と氏名を必ず記入してください。封筒が同封されていないか、あるいは紛失した場合には、「会長・評議員選挙投票用紙在中」と朱書きした任意の封筒で、下記の投票用紙送付先まで郵送してください。その場合、切手代はご負担ください。なお、投票用紙の再発行はいたしません。
5. 開票：2026年7月18日（土）に開票します。開票場所は新潟大学を予定しています。会員2名以上の立ち会いのもとに開票します。会員は開票に立ち会うことができます。立ち会いを希望される場合は、開票日時・場所の詳細を追って連絡いたしますので、選挙管理委員長までご連絡ください。
6. その他、不明な点などございましたら下記宛ご連絡ください。

投票用紙送付先および連絡先

〒950-2181

新潟県新潟市西区五十嵐2の町8050番地 新潟大学教育学部

日本植物分類学会 選挙管理委員長 志賀 隆

e-mail: shiga@ed.niigata-u.ac.jp

## 2026年度日本植物分類学会第25回大会（熊本）の報告

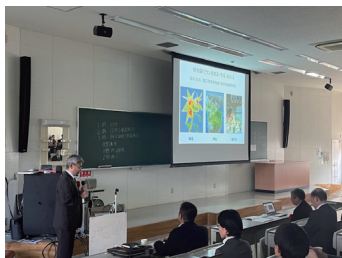
大会会長 副島顕子（熊本大・院・先端科学）

実行委員長 藤井紀行（熊本大・院・先端科学）

### 1) 概要

日本植物分類学会第25回大会が2026年3月5日（木）から8日（日）までの日程で、熊本大学黒髪南キャンパスにて開催されました。参加総数（公開シンポジウムを除く）は260名で、内訳は一般178名（うち当日参加

14名)、学生 82 名 (同 6 名) でした。研究発表では、49 題の口頭発表と、95 題のポスター発表がありました。そのうち、口頭発表 20 題、ポスター発表 32 題が、大会発表賞の審査対象となりました。3 月 7 日 (土) にはランチョンセミナー「標本資料に基づいて、日本・台湾・韓国の 3 国間の分類学の歴史を語る」を開催し、日本から呂田仁氏、台湾から Jer-Ming Hu 氏、韓国から Chan-Ho Park 氏が登壇し、日本のハーバリウムが果たしてきた国際的な役割についてお話しいただきました。同日午後は総会後に、学会賞および奨励賞の受賞講演が行われ、遊川知久氏、瀬井純雄氏、倉田正観氏、設楽拓人氏により、様々な分類群・解析手法・視点に関する多様で熱意あふれる話題が展開されました。また同日夜のメルパルク熊本における懇親会には、188 名 (一般 122 名、学生 66 名) にご参加いただきました。会場では鏡割りなどの催しも行われ、終始和やかな雰囲気の中で参加者同士の交流が深まりました。さらに最終日 3 月 8 日 (日) に開催した公開シンポジウム「栽培植物の魅力を探る—ワサビ・イグサ・肥後六花など—」では、松下夏海氏、仁田坂英二氏、山根京子氏、木原久美子氏、田中孝幸氏により、身近な栽培植物についての歴史的・文化的な背景や生物学的知見を最新情報とともに講演いただき、当日参加を含め多くの参加者を集めました。ご講演いただいた皆さまには、心よりお礼申し上げます。



口頭発表会場 (学会賞授賞講演の様子)



学会賞 左：遊川知久氏 右：瀬井純雄氏



論文賞受賞の様子



奨励賞 左：倉田正観氏 右：設楽拓人氏

## 2) 収支

第 25 回大会の収支は、以下の通りです。大会および公開シンポジウムについては、熊本大学理学部に共催をご承認いただき、会場を熊本大学より無償でお借りしたことで、大会運営費を抑えることができました。さらに熊本県では、県内へのコンベンション誘致を促進することを目的とした助成制度があり、熊本国際観光コンベンション協会より本大会に対して合計 180,000 円の助成金を受けました。加えて、昨年の高知大会に続き寄付金を募り、44 名の皆さまから合計 96,000 円のご支援をいただきました。ご支援をいただいた皆さまには、この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、大会参加者数が予測を上回ったことにより、156,688 円の黒字となりました。以上の結果、学会からの大会補助金 100,000 円を使用せずに大会を運営することができました。従いまして、本大会における学会補助金相当額と残高 56,688 円を次年度へ繰り越し、前回までの繰越金と併せて、繰越金総額を 667,068 円といたしました。

### 第25回大会収支決算報告概要 (単位：円)

収入		支出	
大会参加費	1,180,000	会場費	0
懇親会費	1,279,000	要旨集印刷費	355,299
弁当代	122,400	アルバイト代	422,165
要旨集販売	33,000	旅費	83,340
熊本国際コンベンション協会助成	180,000	謝金 (公開シンポ)	50,000
寄付	96,000	懇親会費	1,538,625
学会からの助成	100,000	弁当代	177,765
前年度繰越金	510,380	消耗品・茶菓子・雑費	147,518
		その他	59,000
		繰越金	667,068
総計	3,500,780		3,500,780

### 3) 大会組織

第25回大会実行委員会は、熊本大学教員（副島顕子、藤井紀行、澤進一郎、渡邊将人）、東海大学教員（的場英行）、福岡教育大学教員（福原達人）、九州大学教員（三島美佐子）、熊本大学関係者（堀麻紀、村山（竹下）香織）で構成しました。実行委員の皆さまには多大なるご尽力を賜りました。さらに、会場設営や大会準備、期間中の運営にあたっては、熊本大学および東海大学の学生の皆さまに多大なるご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

### 4) 研究発表、ランチセミナーと公開シンポジウム

研究発表の初日は、発表賞の評価対象となる口頭発表がほぼ終日にわたって行われました。今回の新しい試みとして、発表賞の対象は先着20演題に限定しましたが、これは近年増加している発表賞応募数に対応し、審査員の負担軽減を図ることを目的としたものです。当日の夕方にはポスター発表も開催されましたが、今回は95演題と多数にのぼったため、ポスター会場をロビーのスペースも含めた3カ所に分けて実施いたしました。さらに、ポスター発表の発表賞選考については、大会の約1週間前にポスターのデータをアップロードしていただき、事前審査を行うという新しい取り組みを導入しました。これにより、審査員の先生方が当日はより余裕をもって発表内容を審議されたことと思います。

二日目一般口頭発表は、午前8時15分というやや早い時間からの開始となりました。本大会は、評議員会を除き3日間で収まるように日程を調整したため、全体としてタイトなスケジュールとなりましたが、大きなトラブルもなく、概ね予定通りに進行することができました。これは、座長の先生方が活発な議論を促しつつ、適切に進行してくださった賜物であり、ここに深く感謝申し上げます。

三日目最終日の午後には公開シンポジウムを開催いたしました。今回は、地元一般市民の方々にも関心を持っていただけるよう、身近な栽培植物をテーマとして講演者を選定しました。その結果、学会員以外の一般参加者約20名にもご来場いただき、専門分野の枠を超えた活発な意見交換が行われました。

### 5) 懇親会

予想を超える188名にご参加いただきました。2014年に熊本で開催した大会（日本植物分類学会第13回熊本大会）の懇親会では会場がやや手狭であったことを踏まえ、今回は200名まで収容可能な会場を用意しましたが、ほぼ満員となりました。懇親会は、日本植物分類学会会長 永益英敏氏のご挨拶に続き、熊本大学理学部長 磯部博志氏からご挨拶をいただいた後、樽酒の鏡割りにより開会しました。副島大会会長が厳選した日本酒も提供し、参加者の皆様に好評でした。会場は終始活気にあふれ、アナウンスが聞き取りにくいほどの盛況となりました。



懇親会のスタート



懇親会場の様子（メルバルク熊本）

### 6) 課題等

開催日程については、実行委員会で協議し、前回の高知大会と同様に発表日程を3日間としました。口頭発表の演題数は前回とほぼ同程度でしたが、「口頭またはポスター発表のいずれでも可」とされた方にはポスター発表をお願いしました。ご協力に感謝申し上げます。開催期間としては3日間が適当と考えられますが、今後さらに口頭発表数が増加した場合には、現行の日程では対応が難しくなる可能性があります。一方で、ポスター発表数は高知大会を上回り、今回は3カ所に分散して実施することとなりました。今後は、ポスター会場をより広く確保する必要があると考えられます。

予算については、今回は熊本大学理学部との共催により施設利用料が発生しませんでした。この対応は例外的である可能性があります。昨年度の高知大会では高知大学との共催であったものの、施設利用料が計上されていました。本大会においても当初は施設利用料を見込んで予算を組んでいましたが、仮にこれを支払っていた場合には赤字となり、前年度からの繰越金を取り崩す必要があったと考えられます。物価上昇が続く中で、大会運営に係る予算の見直しを立てることは容易ではなく、今後の重要な検討課題といえます。

### 7) おわりに

大会の準備および会期中には、一部プログラムの変更も含め、不行き届きの点やご迷惑をおかけする場面があったかと存じます。ご参加の皆さまにはご不便をおかけしましたこと、深くお詫び申し上げます。それにもかかわらず、多くの温かいお言葉や励ましを頂戴し、さらに数多くの差し入れまでお寄せいただきましたこと、心より感謝申し上げます。こうして大会を無事に盛会のうちに終えることができましたのも、ひとえにご参加の皆さまのご理解とご協力、ご支援の賜物であり、実行委員会一同、厚く御礼申し上げます。

## 2026 年度大会発表賞の報告

大会発表賞選考委員長 ニッタ ジョエル

日本植物分類学会第 25 回大会において優れた研究発表を行った若手研究者に授与する大会発表賞は、エントリー総数 50 名（口頭発表 19 名、ポスター発表 31 名）のうち、以下の 5 名に決まりました。

口頭発表賞（大会プログラム掲載順）

OE13 村上将希（都立大・牧野標本館）

「海洋島に進出したガクアジサイにおける種子散布能力の低下プロセスの検討」

OE20 石川弘晃（北大・農・院）

「本土最東域・根室地方の植物相解明への挑戦：亜寒帯・  
温帯の接点に見る分布限界と隔離分布」



発表賞受賞の様子

ポスター発表賞（大会プログラム掲載順）

PE09 YU Jiaxin（京大・人間・環境学研究所）

「蛇紋岩環境はスミレにどのように影響するのか？相互移植実験・  
イオニクス分析による植物と土壌のイオン組成の比較」

PE12 深谷航（東北大・院・生命）

「全ゲノム情報で紐解く日本産ヤナギ属の多様化過程」

PE26 生田睦稀（東北大・理）

「特異な分布パターンを示すキバナアキギリの分布成立過程を考察する」



懇親会で賞状を  
受け取る受賞者

発表賞にエントリーできるのは、パーマネントポストに就いていない学会員で、筆頭発表者かつ演者の方です。審査は、学会会長、評議員、そして昨年度の大会発表賞受賞者からなる選考委員によって行われ、「研究内容（5点）」と「プレゼンテーションのうまさ（3点）」の2つの指標について、合計8点満点で評価します。その平均点をもとに、選考委員の合議によって受賞者を決定します。今回の審査は、19名の選考委員で行いました。

今年も、発表のレベルは全体的に非常に高く、その中から受賞者を決めるのは大変でした。多くの研究が多面的なアプローチを取り、最先端の技術を用いて、それぞれが取り組んでいる課題を高い解像度で明らかにしています。その中でも受賞者の研究は、特にアプローチの新規性やデータの豊富さ、また、デザインの美しさと分かりやすさ、などの点で、優れていると評価されました。

受賞者の皆様、おめでとうございます。また、エントリー者全員から素晴らしい発表をいただき、ありがとうございました。審査員の皆様にはお忙しい中、丁寧に審査していただき、大変助かりました。この場を借りて御礼申し上げます。

なお、第25回大会では、審査員の負担を減らすため、初の試みとしてエントリー数の制限およびポスターの事前登録を行いました。これにより、審査員は余裕を持って一つ一つの発表をより詳細に審査することができ、非常に好評でした。以上の点を踏まえ、来年の大会も同様の方法で進める予定ですので、エントリーを予定されている会員の皆様は、今後ニュースレターに掲載される大会に関するアナウンスにご注意ください。来年の大会でも、多くの会員の皆様からの積極的なエントリーを期待しております。

## 2026 年度大会発表賞受賞者喜びの声

OE13 村上将希 「海洋島に進出したガクアジサイにおける種子散布能力の低下プロセスの検討」

東京都立大学牧野標本館の村上将希です。この度は口頭発表賞に選んでいただき大変光栄に存じます。

今回の発表では、島嶼環境における植物共通の進化的傾向のひとつである種子の散布能力の低下現象がどのようなプロセスを経て生じるのかについて、ガクアジサイを対象に種子形質と滞空能力の実験的評価と全ゲノム解析を用いて検討しました。その結果、ガクアジサイでは本州から南方への飛び石上の分布拡大に伴って種子形質の変化と種子散布能力の低下が生じていることが明らかになりました。また、一見すると連続的な種子散布能力の低下が、実は伊豆諸島と小笠原諸島でそれぞれ異なる背景で生じたことが示唆されました。一方で、種子散布能力が低下することの生態的意義（そもそもあるのかも含めて）は依然として不明であるので、引き続き研究を続けていきたいと思えます。

本研究では、牧野標本館、東京都環境局をはじめとする多くの方々にご多大なるご協力をいただきました。この場をお借りして深くお礼申し上げます。また、厳冬の時期にもかかわらず、種子の落下実験に連日お付き合いただいた東北大学植物園のみなさまにも感謝申し上げます。



ガクアジサイ



調査の様子

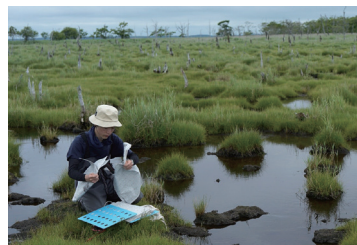
## OE20 石川弘晃「本土最東域・根室地方の植物相解明への挑戦：亜寒帯・温帯の接点に見る分布限界と隔離分布」

北海道大学農学院の石川弘晃です。この度は大会発表賞（口頭）という名誉ある賞を頂戴し、誠に光栄に存じます。私は学部生の頃より、北海道の東端にある根室地方の維管束植物相の研究を行っております。本大会では、標本・文献・現地調査に基づく根室地方の植物目録の作成と、本地方に分布限界を持つ植物種について発表いたしました。分布限界に関する検討は、根室地方が亜寒帯の辺縁に当たること、かつて北大の館脇先生が提唱された「北海道の植物相は亜寒帯・温帯の移行帯」という説に着想を得たものです。講評では、標本を最大限活用した点を評価いただきました。標本調査には大変労力がかかっており、報われた思いであります。今後は、目録の一層の充実を図るとともに、解析的な検討を加えながら、本地方の植物相について理解を深めていければと考えております。

本発表をまとめるにあたりご指導賜りました、所属研究室・ゼミの皆さま、新潟大合同ゼミの皆さまに深く感謝申し上げます。また、これまで標本を採集・作成し、守り・伝えて下さったすべての皆さまに、心より敬意を表します。



北大総合博物館の根室産ユキワリコザクラ標本



調査の様子 根室地方の塩湿地にて

## PE09 YU Jiaxin 「蛇紋岩環境はスミレにどのように影響するのか？相互移植実験・イオニクス分析による植物と土壌のイオン組成の比較」

京都大学人間・環境学研究所のYU JIAXINと申します。この度ポスター賞を受賞させていただき、大変光栄に感じております。私の研究は常に「スミレ」を中心に展開していますが、今回は「蛇紋岩」という観点から検討しました。風化した蛇紋岩環境は一般的な認識と異なり、現地の母岩は蛇紋岩でありながら表面に黒い土壌が薄く広がり、矮小化したカシワ林も進出しています。つまり、蛇紋岩要素を保留したまま、他の植物も生きやすくなるような環境へ変化していると言えます。このように、0（蛇紋岩）と1（非蛇紋岩）に限らず、0 → 1へ変化する過程でも大変興味深いと考えております。この変化過程で生育環境上接触できないはずの2種が偶然に出会い、中間地帯では幻の交雑種が維持されています。本研究の醍醐味は、環境の変化に応じて植物の分布も変わり、植物間の新たな交流（交雑）によって種の分類と認識が更新されていくところです。今後は有効放射量や土壌水分量といった環境要因と植物の応答を網羅的に考慮し、さらに理解を深めていきたいと思っております。

本研究は共同研究者や分析技術員を含め、多くの方々のご指導とご助力をいただきました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

オオタチポスミレとアイスタチポスミレの交雑種  
(葉の形はオオ寄り、側弁はアイズと同様に有毛)

蛇紋岩への移植実験の様子

## PE12 深谷航 「全ゲノム情報で紐解く日本産ヤナギ属の多様化過程」

東北大学生命科学研究科の深谷 航と申します。この度はポスター発表賞に選んでいただき、大変光栄に存じます。私は、日本産ヤナギ属の進化史解明を大きな目標とし、研究を進めています。日本産ヤナギ属には、交雑実態、多倍体の起源、分類学的扱いなど、未解決の課題が複数残されています。今回は、これらの課題に取り組む際の基盤となる、日本産および海外産ヤナギ属の高解像度の系統関係を推定しました。その結果、日本産ヤナギ属は複数の地域に起源を持つ複数の系統で構成されることが明らかになりました。さらに、一部の系統における顕著な形質進化や、系統内での交雑も示唆されました。今後は、ゲノム情報を用いた集団スケールでの交雑実態や倍数化プロセスの解明、環境適応メカニズムの探索など、さらに研究の幅を広げて本属の進化史に迫りたいと考えています。

最後に、大会関係者の皆様および日頃からご指導いただいている共著者の先生方に、心より感謝申し上げます。



断崖絶壁に生えるシライヤナギ@埼玉県



調査時の様子@山形県

## PE26 生田睦稀 「特異な分布パターンを示すキバナアキギリの分布成立過程を考察する」

東北大学の生田睦稀です。この度はポスター賞をいただき、誠にありがとうございます。キバナアキギリは本州から九州にかけて広く分布する一方で、北陸から紀伊半島にかけて大きな分布の空白域が存在しており、その空白域を埋めるように近縁種であるアキギリが分布しています。

本研究では、この特異な分布がどのようにして形成されたのかという問いに対し、分子系統解析を行うことで新たな仮説を提示しました。この分布成立過程の解明は、日本列島における植物の分布変遷や種分化の理解に資する重要な知見になると考えています。

解析の過程では何度も壁に直面しましたが、その都度、仮説を立て直しながら試行錯誤を重ねてきました。こうして研究を進めることができたのは、牧先生をはじめとする研究室の皆さま、ならびに共同研究者の方々のご指導とご支援のおかげです。この場をお借りして心より御礼申し上げます。



アキギリ



キバナアキギリ

## 2026年度 第1回評議員会 議事抄録

庶務幹事 高野 温子

会場：熊本大学 黒髪南キャンパス理学部

1/2階 中講義室 (C227)

開催日時：2026年3月5日 15時～18時

参加者：評議員 12名のうち出席 11名

現地出席 [11名]：片桐 知之、志賀 隆、副島 顕子、西田 佐知子、藤井 伸二、首藤 光太郎、松崎 令、西野 貴子、米倉 浩司、ニッタジョエル、池田 博

委任状出席 [1名]：細矢 剛 (議長に委任)

幹事会・委員会委員長：( )内は役職

出席 [15名]：永益 英敏 (会長)、高野 温子 (庶務)、永濱 藍 (会計)、李 忠建 (図書)、大槻 達郎 (ニュースレター)、佐藤 博俊 (ホームページ)、厚井 聡 (和文誌編集長)、朝川 毅守 (自然史学会連合)、岩崎 貴也 (日本分類学会連合)、藤井 伸二 (絶滅危惧植物専門第一委員会委員長)、大西 亘 (植物データベース専門委員会委員長)、田中 伸幸 (標本問題対応委員会委員長)、黒沢高秀 (研究・普及推進委員会委員長)、池田 博 (国際シンポジウム準備委員会委員長)、横川 昌史 (講演会担当)

オンライン出席 [2名]：根本 秀一 (野外研修会担当)、梶田 忠 (学会賞選考委員長)

欠席 [3名]：村上 哲明 (ABS 問題対応委員会委員長)、細矢 剛 (絶滅危惧植物専門第二委員会委員長)、布施 静香 (編集委員長・英文誌編集)

1. 評議員会開催にあたり、永益英敏会長から挨拶があった。
2. 庶務幹事により定足数が確認された。会長、評議員 12 名の計 13 名出席、欠席なしにより評議員会は成立した。
3. 評議員会議長として池田博氏、議事録署名人として議長に加え、米倉浩司氏、首藤光太郎氏が選出された。
4. 報告事項
  - 4.1. 自然史学会連合関連報告 2025 年度活動報告および 2026 年度活動計画の説明がなされた。
  - 4.2. 日本分類学会連合報告 2025 年度活動報告および 2026 年度活動計画の説明がなされた。
  - 4.3. 各種委員会に関する報告がなされた。
    - (1) 編集委員会 英文誌「Acta Phytotaxonomica et Geobotanica」および和文誌「植物地理・分類研究」の 2025 年度編集状況、および 2026 年度出版計画について説明があった。
    - (2) 学会賞選考委員会 日本植物分類学会賞の選考経過の説明があった。
    - (3) 論文賞選考委員会 日本植物分類学会論文賞の選考経過の説明があった。
    - (4) 植物データベース専門委員会 国内の植物分類学系学術誌の情報ならびに、植物分類学関連の web データベースの情報整理を進めた。これまでに整理したそれらの情報の公開準備を行った。
    - (5) 絶滅危惧植物専門第一委員会 今年度は特に活動を行っていない。
    - (6) 絶滅危惧植物専門第二委員会 今年度は特に活動を行っていない。
    - (7) APG 問題対応委員会 2025 年は、委員会としての活動は特に行っていない。ただし、文科省から経済的支援を受けている牧野標本館 ABS 支援チームを通じて会員に対する ABS 対応の支援を行った。
    - (8) 国際シンポジウム準備委員会 東アジア国際植物分類学シンポジウムを中国雲南省・昆明で開催すべく準備を進めたが、諸般の事情により延期された (ニュースレター 98 号、99 号で報告)。
    - (9) 標本問題対応委員会 今年度は、輸入禁止品に該当する植物の学名のシノニムの扱いについて、学術研究に支障がない運用の方向性について、農林水産省植物防疫所と協議を開始した。また、寄生・半寄生植物の果実付き標本についての取り扱いを協議した。その他、会員に対して海外に標本を郵送する際の invoice の記載方法について助言を行った。
    - (10) 研究・普及推進委員会 各委員が取り組んできた活動を整理し、委員会全体としての活動を標本、標本レスキュー、命名・タイプに分け、それぞれのチームを発足し、活動を開始した。各委員の主体的な活動も含めて、大阪市立博物館ミニ展示「植物の標本を使って研究する」、標本室の防虫対策相談や命名法やタイプの相談への対応などが行われた。2026 年度も、引き続き幹事会や他の委員会等と連携しながら、植物分類学の研究の推進、一般への普及、地域植物研究会の問題・課題や連携に取り組んでいく。
  - 4.4. 図書関連報告 寄贈雑誌・交換状況、バックナンバーの販売状況の説明がなされた。
  - 4.5. ニュースレターに関する報告 2025 年度実施報告、および 2026 年度準備状況の説明がなされた。
  - 4.6. ホームページ・メールニュース関連報告 学会公式 HP およびメールニュースの運用状況の説明がなされた。
  - 4.7. 会務報告 2025 年度の事業報告がなされた。
  - 4.8. 会計報告 2025 年度の会員状況、会費滞納者の状況の説明がなされた。
  - 4.9. その他
    - (1) 後援会報告 2025 年度の講演会の実施について報告がなされた。
    - (2) 野外研修会について 2025 年実施報告、および 2026 年度準備状況について説明がなされた。
5. 審議事項
  - 5.1. 2025 年度事業報告 (案) について  
高野庶務幹事より 2025 年度事業報告 (案)、永濱会計幹事より 2025 年度決算報告 (案) が提案され、承認された。
  - 5.2. 2026 年度事業計画 (案) について  
高野庶務幹事より 2026 年度事業計画 (案)、永濱会計幹事より 2026 年度予算 (案) が提案され、質疑の後、承認された。
  - 5.3. 寄附の受領手続きについて  
寄附申込規定と申込書の様式が提案され、質疑の後、承認された。

- 5.4. 育志賞推薦手続きについて  
高野庶務幹事から推薦手続きの方法が提案され、質疑の後、承認された。
- 5.5. 緊急時における予備費の執行手順について  
永益会長から標本レスキュー等の緊急時における予備費の執行手順について提案され、質疑の後、承認された。
- 5.6. 次期会長・評議員選挙について  
会長の評議員会推薦を行うことを決定し、投票の結果、永益英敏氏、西田佐知子氏、藤井伸二氏（五十音順）の3名の推薦が決まった。選挙管理委員会委員長と委員が会長により指名された。
- 5.7. 大阪公立大学附属植物園の共同利用・共同研究拠点認定に対する「機能強化支援」の要望書提出について  
高野庶務幹事から経緯説明と要望書案が提示され、質疑の後、承認された。
- 5.8. 名誉会員の推薦について  
永益会長より50年以上の在籍が確認された会員2名を名誉会員として推薦することが提案され、承認された。
- 5.9. 除名について  
4年にわたり会費未納の会員4名に対し、除名候補とすることが提案された。そのうち2名は評議員からの連絡に応じ会費納入の意思を示したことから、連絡のつかない2名を対象者とした。
6. その他
  - 6.1. 総会議事について  
高野庶務幹事より、総会議事について議事次第の提案がなされた。
  - 6.2. 第26回、27回大会開催地について  
永益会長より、第26回、および第27回大会の開催地が決定したことが報告された。
  - 6.3. 会員からのご意見：不適切な植物和名の変更について  
高野庶務幹事より経緯と、評議員に意見を求めたい旨の説明があった。他学会の状況説明や、検討会を立ち上げる意見があったが、最終的に検討会を立ち上げるまでには至らないという結論になった。
  - 6.4. 屋久島ソサエティからの情報共有、および宇久島開発事業にかかる環境保全対策の要望について（その後）  
高野庶務幹事より、屋久島ソサエティから屋久島・一湊川砂防メンテナンス工事にかかる要望書を提出したという連絡があったこと、長崎県植物誌研究会から宇久島開発事業にかかる要望書提出の依頼の取り下げがあったことが報告された。
  - 6.5. 日本学術会議 会員推薦について  
高野庶務幹事より、2026年1月に日本学術振興会から次期会員の推薦依頼があったこと、諸事情により今回の推薦は見送るものの、次回（2029年1月予定）の会員推薦に向けて準備を進めることが報告された。

## 2026年度 総会議事抄録

庶務幹事 高野 温子

日時・場所：2026年3月7日（土）13:15～14:25  
熊本大学黒髪南キャンパス 工学部2号館

1. 総会に先立ち、永益英敏会長、および副島顕子大会会長から挨拶があった。
2. 逝去された学会員に対して黙祷が捧げられた。
3. 三島美佐子会員が議長に選出された。
4. 報告事項
  - 4.1. 会務報告  
高野庶務幹事より、報告内容は第一号議案と同じであるため、議案審議の際に報告するとの説明があった。
  - 4.2. 会員数について  
永濱会計幹事より、会員数の説明がなされた。
  - 4.3. 各委員会からの報告  
絶滅危惧植物専門第一委員会および同第二委員会、植物データベース専門委員会、国際シンポジウム準備委員会、標本問題対応委員会、ABS問題対応委員会、研究・普及推進委員会、学会賞選考委員会、国際命名規約邦訳委員会、論文賞選考委員会、大会発表賞選考委員会の各委員長またはその代理から活動報告がなされた。
5. 審議事項  
審議に先立って、現地会場での総会出席者数の確認を行い、庶務幹事より115名（のちに123名）であることが報告された。

- 5.1. 【第一号議案】2025 年度事業報告、ならびに 2025 年度決算報告  
前年度の事業報告と決算報告が、高野庶務幹事と永濱会計幹事よりそれぞれ説明された。池谷祐幸、井上侑哉両監事により、会務および会計が適切であるとの監査結果が提示された。審議の結果、賛成 123 票、反対 0 票で出席者の賛成多数をもって承認された。
- 5.2. 【第二号議案】2026 年度事業計画、ならびに 2026 年度予算案  
高野庶務幹事と永濱会計幹事より本年度の事業計画と予算案の説明があった（ニュースレター 100 号に掲載のとおり）。審議の結果、賛成 122 票、反対 0 票で出席者の賛成多数をもって承認された。
- 5.3. 【第三号議案】名誉会員の推薦について  
永益会長より、本会在籍期間が 50 年と確認された西田謙二会員、堀井雄治郎会員の 2 名が名誉会員に推薦され、賛成多数をもって承認された。
6. その他
- 6.1. 第 26 回大会開催地について  
次の第 26 回大会について、茨城県南部にて開催されることが永益会長より告知され、遊川知久次回大会会長より挨拶があった。
- 6.2. 野外研修会について  
根本担当役員に代わり、高野庶務幹事から本年 6 月に青森市立森林博物館等の協力を得て青森県内で開催されることが告知された。
- 6.3. 会員から、「2025 年決算が 100 万以上の赤字であり、将来を見据えると現行の会費ではもたないのでは。執行部で値上げを検討してはどうか。」という意見が出された。永益会長から 2025 年度の赤字について経緯説明と、英文誌の電子化や J-stage への全文 XML 形式での投稿義務の発生等、近い将来に更なる予算増が予想されることから、値上げを検討していきたいという発言があった。布施編集委員長から、英文誌の電子化は決まった話ではないこと、投稿規定を改正して超過頁のチャージを明文化し徴収することで今後の出版赤字を回避することの補足説明があった。

## 2026 年度事業計画および予算

庶務幹事 高野 温子

ニュースレター 100 号（前号）にて掲載した 2026 年度事業計画案、および予算案は、総会において修正はなく、そのまま承認されました。変更がないため本号での再掲は割愛いたします。

## 2025 年に到着した交換図書一覧

図書幹事 李 忠建

Aliso 43(1)  
Annals of the Missouri Botanical Garden 109  
Biodiversity & Ecology 46(6)  
Bulletin de la Société d'Histoire Naturelle de Toulouse 160  
Candollea 79(2), 80(1), 80(2)  
Colloquium Geographicum 40  
Fritschiana 102  
Gardenwise 64  
Kew Bulletin 80(2)  
Korean Journal of Plant Taxonomy 55(1), 55(2), 55(3)  
Plant Diversity (Plant Diversity and Resources) 47(1), 47(2), 47(3), 47(4), 47(5)  
Plant ecology & diversity 17(5-6)  
Revue Valdôtaine d'Histoire Naturelle 78  
Senckenberg Monographs 1, 2  
Flore illustrée du Burkina Faso et du Mali 1, 2  
Smithsonian Contributions to botany 120, 119, 121  
Thai Forest Bulletin 51(1-2)  
the Bulletin of the National Tropical Botanical Garden 41

Willdenowia 54(2-3)  
 生命世界 (life world) 411-422 計 12 巻  
 大自然 242(1), 242(2),  
 國立臺灣博物館學刊 77(4), 78(2), 78(3)  
 大阪市立自然史博物館研究報告 78  
 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 55  
 自然史研究 (大阪自然史博) 4(8)  
 神奈川県植物誌調査会ニュース 95, 96,  
 Bulletin of the National Museum of Nature and Science 50(3), 50(4), 51(1), 51(2)  
 徳島県立博物館研究報告 35  
 Journal of Plant Research 138(1), 138(2), 138(3), 138(4), 138(5), 138(6)  
 The Journal of Japanese Botany 100(1), 100(2), 100(3), 100(4), 100(5), 100(6)  
 蘚苔類研究 13(4), 13(5), 13(6)  
 三訂版・コケ類研究の手引き (日本蘚苔類学会)  
 岐阜県植物研究会誌 39  
 岐阜県植物研究会会報 200, 201, 202, 203  
 近畿植物同好会々誌 48  
 近畿植物同好会会報 140, 141  
 兵庫県植物誌研究会会報 139  
 奈良植物研究 45, 46

## お知らせ

### 2026 年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ

野外研修会担当 根本秀一

青森市森林博物館の辻村収さんにご協力いただき、6月20日(土)に下北半島東部海岸の植物を観察します。翌、6月21日(日)は希望者を対象に青森市森林博物館の常設展示と植物収蔵庫を見学します。

【6月20日(土)】下北半島の植物観察会

集合時間・場所

公共交通機関の方：青い森鉄道三沢駅 東口広場 午前8時30分

<https://maps.app.goo.gl/C2pJ1Wqo6ScPXsFS7>

自家用車の方：三沢市民の森総合運動公園駐車場 午前9時

<https://maps.app.goo.gl/soBZvPM9nfqiVgVX7>

午前 東通村猿ヶ森ヒバ埋没林

海岸のクロマツ林の中に、約1000年前に堆砂で立ち枯れたヒバが残ります。砂地の林床にハイゴケやハナゴケが生え、オオウメガサソウの群落をはじめ、ベニバナイチヤクソウ、ジンヨウイチヤクソウなどのイチヤクソウ類、小川沿いではミズバショウも見られます。

午後 六ヶ所村海岸塩生湿地

オオクグ、クロハリイ、ヒメウシオスゲ、ヤマメスゲ、エゾツルキンバイ、マルミノシバナ、センダイハギ、エゾルンリソウ、コハマナスなどの海浜植物が観察できます。

※青森県東部で地震が頻発しております。津波注意報の発令などで、観察場所を変更することがあります。

公共交通機関の方は、午後5時までに、三沢駅送迎予定

【6月21日(日)】青森市森林博物館見学

集合時間・場所

森林博物館入口 午前9時集合

〒038-0012 青森県青森市柳川2丁目4-37

<https://www.aomori-shi.shinrinhakubutsukan.jp/>

JR 青森駅から徒歩 10 分・駐車場あり  
 常設展の自由見学と、植物標本庫の閲覧を行います。  
 ・入館料 250 円・自由解散（午後 5 時閉館）



申込フォーム

【宿泊】必要な方は参加者自身でご予約下さい。

1 日目は三沢駅周辺、2 日目は青森駅周辺での前泊が便利です。

【参加費】2～3,000 円程度（人数により変動します）6 月 20 日集合時徴収

内訳：集合場所から観察地への交通費、保険代ほか

・宿泊費、集合場所までの交通費は個人負担です。

・青森市森林博物館のみご希望の方はご相談ください。

【募集人数】20 名程度（会員を優先しますが、会員外の参加も可能です）

【申込み先】お申込フォーム（<https://forms.gle/zSj3YoD5GeuoCVqv5>）

郵便：〒309-1626 茨城県笠間市下市毛 1370-1 根本秀一宛

郵便でお申し込みの際は、緊急時にご連絡できるお電話番号、生年月日（保険に使用します）、

ご希望の参加日程、交通手段をお知らせください。

・ご連絡いただいてからおおむね 1 週間以内で受付の返信をいたします（郵便の場合にははがき、またはお電話を  
 差し上げます）。万が一返信等がない場合には、恐れ入りますが再度ご連絡いただきますようお願い申し上げます。

問い合わせ等は、窓口の根本秀一（e-mail：[kemushikusa@gmail.com](mailto:kemushikusa@gmail.com)）宛にお願いいたします。

【申し込み〆切】6 月 8 日（月）

## 日本植物分類学会第 26 回大会（茨城）のお知らせ

第 26 回大会会長 遊川知久

日本植物分類学会第 26 回大会を下記の通り開催いたします。

大会および参加申し込みに関する詳細は、大会ホームページならびに 2026 年 11 月号のニューズレターでお知らせいたします。会場は 9 月頃に確定する見込みです。

【会場】未定（茨城県南部 [土浦市・つくば市周辺] を予定)

【日程】2027 年 3 月 3 日（水）：各種委員会・評議委員会

3 月 4 日（木）：研究発表

3 月 5 日（金）：研究発表・総会・受賞講演・懇親会

3 月 6 日（土）：研究発表・公開シンポジウム

【ホームページ】<https://sites.google.com/view/jsps2027ibaraki/>

【問い合わせ先】日本植物分類学会第 26 回大会（茨城）大会実行委員長 海老原 淳

## 2026–2027 年度日本植物分類学会役員選挙被選挙人名簿





## 寄稿

---

### 種数の数え方

亜熱帯植物研究所 中西弘樹

分類学はもちろんのこと、フロラや生態学の研究でも種数あるいは種類数を示さなければならない場合があります。その数え方は簡単そうで以外に間違いやすいようです。私がこれまで投稿した論文に対する校閲者から、種数の数え方について誤って指摘された場合が何度かありましたし、分類学者も誤って記している例がありました。私は分類学専攻ではありませんが、かなり前からそのことが気になっていました。そこで、以下のような例題を作りましたので、みなさんには考えてもらいたいと思います。

○以下の種数をどのように示すか、下記の解答例から選べ。

<i>Viola japonica</i>	コスミレ
<i>V. mandshurica</i>	スミレ
<i>V. mandshurica</i> var. <i>triangularis</i>	アツバスミレ
<i>V. verecunda</i> var. <i>semilunaris</i>	アギスミレ
<i>V. violacea</i> var. <i>makinoi</i>	マキノスミレ

[解答例]

a. 2 種 3 変種   b. 4 種 3 変種   c. 4 種 2 変種   d. 4 種 1 変種

a と考えた人は学名を見て var. のついていないものは種と、ついているものは変種と数えたと思われるのですが、変種は種の下位単位ですから、種のない変種はありません。したがって、上記の目録は学名を見てわかるように 4 種あります。では変種を考えた場合はどうでしょう。b と考えた人は学名に var. がついているものをそのまま数え 3 変種としたものでしょう。しかし、アギスミレもマキノスミレも学名上は var. がついています、種が基本ですから、それぞれ 1 種 1 変種とするのではなく、1 種とすればよいでしょう。d とした人はアギスミレ、マキノスミレをそれぞれ 1 種と数えたのですが、スミレとアツバスミレを 1 種 1 変種と数えてしまったのでしょう。スミレの変種アツバスミレが命名されると同時にこれまでのスミレは自動的に *V. mandshurica* var. *mandshurica* と扱われます。群集分類学 Syntaxonomy ではこの点うまくできていて、新しい変群集が記載されると、識別種をもたないものは典型変群集とされます。さしずめスミレ典型変種と言うようなものでしょうか。スミレと言う種の中に、スミレ典型変種とアツバスミレ変種が含まれることとなります。しかし、典型変種と言うような名前をつけませんので、和名のスミレは *V. mandshurica* とする種と、*V. mandshurica* var. *mandshurica* とする変種の両方をさすこととなります。つまり *V. mandshurica* はスミレとアツバスミレの 2 つの変種を含んだもので、1 種 2 変種と数えることとなります。

したがって、問題の解答は c の 4 種 2 変種が正しい答えとなります。

